# イラク戦争

## ユニセフ 子どもネットワーカーからの意見

2003年3月20日（日本時間）にイラクではじまった戦争は、アメリカのブッシュ大統領が、5月1日に戦闘が終結したことを発表したことで終わりを告げました。独裁者だったサダム・フセインの政権はたおされましたが、イラク国内は、戦闘でさまざまな施設が破壊されただけでなく、ひどい略奪などがおこって治安が悪くなり、子どもたちにも大変厳しい状況がつづいています。

©UNICEF/HQ03-0109/Shehzad Noorani

## 今のイラクの子どもたちのようす

戦争がはじまる前から食糧の配給にたよっていた人びとは、戦争や治安が悪くなったために十分な食糧が手に入らなくなりました。そのために、子どもの栄養不良が急速に進んでいます。ユニセフが首都のバグダッドで緊急におこなった調査によると、急性の栄養不良になっている子どもの割合は、昨年の2倍近くになっていることがわかりました。

イラク国内では水と衛生環境の悪化が深刻になっている
©UNICEF/HQ03-0210/Patric Andrade

とくに南部では水の問題が深刻になっています。水道局も略奪され、水を送り出すのに必要な電力を生み出す発電器や水の浄化剤などもうばわれてしまいました。水道管の途中に穴をあけ、水を盗む人もいます。そのため、南部の都市部では、水道から安全な水が手に入らなくなり、子どもたちのげりが急激に増え、脱水症状で亡くなっている子どももいます。また、コレラなどの病気の広まりが心配されています。

バグダッドのごみ捨て場にあったさまざまな種類の爆弾や不発弾
©UNICEF/HQ03-0209/Patric Andrade

病院も略奪されました。だんだん、支援物資が届くようになってきましたが、まだ基本的な医薬品も不足しています。治安が悪いために、多くのお医者さんは避難していて仕事にもどれず、少人数のお医者さんが何十人もの患者をみなければなりません。

また、不発弾などが多く残っていて、子どもをおびやかしています。水くみやたきぎひろいをしている間や、遊んでいる間にこうした不発弾でけがをしたり、命を失う子どももいます。

ストリートチルドレンのためのセンター
略奪によってすべて奪い去られました
©UNICEF/HQ03-0180/Roger Lemoyne

## ユニセフの活動

戦争がはじまる前、ユニセフは「平和こそユニセフの願い」として、戦争をさけるようにうったえつづけてきました。しかし、現実には戦争の危機が高まっていたため、今年はじめ、予定を前だおしにして、子どもたちへの大規模な予防接種キャンペーンをおこないました。いったん戦争がはじまってしまえば、予防接種をするのはむずかしくなり、戦争の中で、はしかなどの病気が広まって子どもたちの命をうばう危険があったからです。また、医薬品や子どもたちの食糧（高たんぱくビスケットや栄養を強化したミルク）、水のタンクなど、必要な支援物資を大量に国内や周辺の国に備蓄しました。

戦争のはじまる直前、国連の決まりによって国際スタッフはイラク国内から退避しました。しかし200人以上のイラク人スタッフが国内に残って、子どもたちに支援物資を届ける活動をつづけました。

戦争がはじまる前にポリオやはしかの予防接種が進められました
©UNICEF/HQ03-0037/Shehzad Noorani

戦争が終わるころから、だんだんとクウェート、ヨルダン、イラン、トルコなどの周辺国からの支援物資を国内に届け入れられるようになりました。たとえば、5月のはじめには、クウェートからイラク南部に、ユニセフの給水車が日に70台近く出され、200万リットル以上の水を届けています。また、医薬品などの支援物資も病院に届くようになりました。

北部では学校が再開されました。ユニセフは学用品などを届けて、これを支援しています。また、バグダッドや南部でもだんだんと学校が再開されつつあります。学校がはじまれば、子どもたちに不発弾の危険を教えたり、心に傷をおった子どもたちをケアすることもできるようになります。ユニセフはこうした面からの支援もおこなっています。

保健センターに届いた高たんぱくビスケット
©UNICEF/HQ03-0214/Patric Andrade

5月19日、首都バグダッド近くで再開された学校を訪れたユニセフ事務局長
©UNICEF/HQ03-0222/Shehzad Noorani

イラクの最新情報は、ホームページでチェック！

**http://www.unicef.or.jp**

*イラク緊急募金も受付中です

## STORY ムンゼールと仲間たち

建物は修理できても、大きな恐怖と不安におそわれた子どもたちの心は、すぐにはなおりません。そんな子どもたちのもとに、今日ユニセフからの支援物資が届いたのです。

ムンゼールは、イラク南部の町バスラにある男の子の孤児院で、友だちから少しはなれたところに立っていました。ちょうど1時間前にユニセフのレクリエーションキットが届き、友だちは、新しいサッカーボールをけりあって遊んでいます。ムンゼールはようやくここに帰ってくることができたのです。

この数週間に、14歳の少年ムンゼールの身の上に起こったできごとはあまりにも過酷でした。

イラクで孤児院などの施設でくらす子どもたちの状況は、イラク戦争がはじまる前もひどいものでした。今は、国からのわずかな支援さえ受けられなくなり、食事も近くの宗教グループが提供してくれる給食にたよっているありさまです。さらに悪いことに、略奪者たちが、こうした施設まで標的にしたのです。銃や爆弾をもった人たちがやってきて、29人の男の子たちの目の前で、施設にあるすべてのものを―扇風機や家具、電気の配線やヒューズまで―うばい去りました。

ユニセフは、孤児院の修復のために活動しています。でも、ムンゼールがこの孤児院にやってきたのは1歳のとき。お母さんは、お父さんに暴力をふるわれることを苦にして自殺し、そのすぐ後、今度はお父さんが、犯罪をおかして終身刑になりました。戦争がはじまる直前に、サダム・フセインは犯罪者すべてを釈放しました。ムンゼールは、釈放されたお父さんとくらすために、いったん孤児院を出ました。しかし、いい時はほんの数日もつづかず、結局、ムンゼールはお父さんに捨てられ、ひとりで街にいるところを保護されて、この孤児院にもどってきたのです。

それからというもの、ムンゼールのようすが変わりました。ひどく怒りっぽくなり、孤児院の戸棚からものを盗んだりするようになりました。そして、あるとき、事件が起こりました。ムンゼールとけんかになった男の子の腕が折れてしまったのです。

業を煮やした孤児院長は、ムンゼールを孤児院から出す、と決めました。ムンゼールはまた街にもどるしかありませんでした。

翌日、ユニセフ・イラク事務所の子どもの保護担当官ガッサンは、ムンゼールがこっそりと孤児院をのぞいているのを見つけました。

「あれは、わざとやったわけじゃないんだ。孤児院にかえりたい…」ムンゼールは悲しそうに話しました。

孤児院の仲間たちが集まる中で、ムンゼールは、「昨日の夜はごみ捨て場ですごしたんだ。ここにもどってきたいんだ」と話しました。そして、孤児院長や仲間たちが話し合い、ムンゼールは帰ってきてもいいことになったのです。

長い1日の終わりに、男の子たちは、レクリエーションキットの中に入っていた、赤と黄色のゼッケンを取り出して、それぞれのサッカーチームの名前を決めはじめました。

「赤はマンチェスター・ユナイテッドの色だろ」とひとりの男の子が言います。「ちがうよ」ほかの子が声をあげました。「レアル・マドリッドだよ」笑い声がひびきます。いつのまにかみんなの輪の中に入ったムンゼールの顔にも明るい笑顔がもどってきていました。

# ユニセフ子どもネットワーカーからの声

「イラク戦争」。子どもたちは、この戦争のことをどのように考えたのでしょう。
ユニセフ子どもネットでは、このテーマについてアンケートをおこないました。
多くのネットワーカーから届いた声をご紹介します。

**質問の内容**

この戦争について考えたこと、感じたこと、印象に残っていること、この問題にかかわっているだれかへの意見など、なんでも教えてください。
これから、この問題について、何かしたいと思っていますか？　子どもたちにはどんなことができると思いますか？

戦争中の子どもの写真は皆同じような目をしていると思いました。必死に生きていこうとしている強い目ですが、恨んでいる目でもあります。子どもの私達ができることは、ものすごく悔しいけれど、未来のために勉強することしかできません。私達はイラクの子ども達の心を考え、思い、想像することはできます。同じ子どもですから。

（多田　真理馨　12歳）

ある写真展で、白血病で入院しているイラクの子どもの写真を見ました。今回の戦争前のもので、いくらか整った医療施設に見え、安心しました。ところが、最近のテレビのニュースを見て驚きました。略奪が繰り返され、とうとう病院の薬品や医療器具にまで手を出してしまっていたのです。戦前に入院していた子ども達は、どうしているのかが気になります。

（N.啓子　15歳）

アメリカが使った武器の中に、放射能を出すものがあって、それは攻撃された場所に、いつまでも放射能の影響が残る。これは核兵器のひとつではないのか？イラクの核兵器を見つけ、それをすてさせる目的で戦争をしたのに、自国が核兵器を使うなんて、矛盾している。

（今関　美都　13歳）

平和を守るためになぜ戦争をするのですか？人が殺されることの、殺すことの、どこが平和なのですか？

（西脇　葉子　12歳）

小さい子どもなど一般の人が誤爆によってたくさん亡くなっているのが、すごく悲しいし、残念でした。戦争によって、フセイン大統領の政権はつぶれたけど、アメリカが主張した大量破壊兵器がまだ見つかっていないので、戦争をやってよかったのか分かりません。

（兼松　美緒　16歳）

ブッシュ大統領には、もう少し話し合いの期間を与えてもらいたかったです。話し合いによって、もしかしたら戦争を防ぐことができ、平和を築くことができたかもしれない、と私は思うからです。

（大屋　このみ　17歳）

おとなは、子どもには、「けんかしちゃだめよ」と言うのに、せんそうをしている。ブッシュ大とうりょうや、フセイン大とうりょうなどのえらい人ははにげのびれるかくりつが高いけど、いっぱんの人はせんそうでしんでしまうかくりつが高いというのが、とてもかなしかったです。

（桜井　香澄　8歳）

ブッシュ大統領への意見：核・生物化学兵器をもっているからだとか、イラク国民をかいほうするため、とかいってたけど、本当は、石油がほしかったんじゃないですか？

（杉浦　健吾　11歳）

ぼきんをしたり、ニュースや本などで今、世界でどんなことがおきているのかを知るだけでも、私たちと同じ、ただ生まれた国がちがうだけの子どもたちに手をさしのべることにつながると思います。

（朝隈　芽生　12歳）

今子どもであるぼくたちが、立派なおとなになって、戦争のない未来を作ることが大切だと思うので、子どもたちが「他人を思いやれる」「戦争はよくない」「人の意見が聞ける」「公平である」といったことなどを学べる機会を作ればよいと思います。日本には、いろいろな組織があって、それぞれ行動を起こしているけど、すべてのNGOやNPOが手をつなげば、大きなことができるのにな、と思います。

（大矢　透　14歳）

子どもたちはなにもしていないのに、子どもたちのところに、ばんばん、ばくだんがふってくるのは、かわいそうなことでした。わたしは、イラクの子どもたちを日本にひなんさせてあげたいと思います。

（廣瀬　智美　8歳）

月に1回、かいたいおもちゃをがまんして、せんそうしている国にお金のプレゼントをしたいと思いました。そして、その国に学校をプレゼントしたいです。その生とたちと、手紙でいろいろなことをいっしょに考えたいです。

（由水　蕗花　8歳）

世の中で「正義」とされていることが本当に「正義」なのか、「正義」は存在するのか、と思いました。また、戦争は弱者が犠牲になるとも感じました。独裁体制は危険だし、多くの犠牲をともなう。結局、どんなにがんばっても政治対立はさけられないから、それが熱い戦争になったとき、いかに弱者を守るか、それが重要だと思いました。

（鈴木　智瑛　14歳）

©UNICEF/HQ02-0558/Shehzad Noorani

フセイン大統領の像がたおされたときが、一番印象に残りました。これでやっと国民が自由になれるのかという、なんていうか、言葉で言い表すことが難しい気持ちになりました。国民はこれで自由になれたけど、これからどうやって国をたてなおしていくのか、という疑問も生まれました。アメリカがやるより、国連がやった方がいいと思います。

（澤田　玲奈　13歳）

事態が緊迫した状態に陥ってから、開戦に至るまで、世界中で多くの反戦デモが行われたにも関わらず、国連の決議も待たれることなく、簡単に戦争がはじまってしまったことにショックを受けました。戦争は終結宣言が出されましたが、まだ終わっていない、ということを子どもの視点からアピールしていきたいです。

（坂　季里子　17歳）

テレビで、イラクに住む私と同じ年の少女のことを見ました。その少女は、戦争に使われた小型爆弾によって視力をほとんど失った上、まだ不発弾があるので、学校に行きたくても行けないというのです。私たちの歩く道は安全だし、舗装されていて歩きやすく、学校にも行けます。それが当たり前の生活になっています。戦争は当たり前の生活を一変させる、そのことの恐ろしさを知りました。

（中村　翔也　12歳）

まず、イラクの現状を正確に知ることが必要だと思う。そして、たくさんの人々に事実を知ってもらって、これからどうすれば平和になるかを考えてもらうことが必要だと思う。だから、「ユニセフ子どもネット祭」を開催するというのは、どうでしょうか。パネルか、自分達が考える平和になる方法（?）などを展示するのです。それから、募金も集めます。ユニセフのグッズや食べ物なども売って、その利益を全額イラクの子どもたちのために!!というのはどうでしょう？

（松井　佳菜　15歳）

私達、子どもにできることは、世界の子ども同士で仲良くなることだと思います。アメリカの子ども達とイラクの子ども達で、サッカーをしたり、野球をしたりして、それを

TV放送すれば、戦争に賛成していたおとなの人達も、何か大切なことに気づくのではないかと思います。

（輿石　夕貴　17歳）

犠牲者を救う手は誰がさしのべるべきか、全世界で考えるべきだと思います。他人事みたいに思わず、みんな力を合わせて支援すべきだと思います。

（丸竹　拓也　13歳）

はじめ、私は、戦争でしかイラクの独裁政権の問題を解決することができないのではないか、という気持ちを心のどこかに抱いていました。しかし、劣化ウラン弾の被害を受けた子どもたちや、今までの戦争によって被害を受けた環境・生き物について知るうちに、決して戦争は答えにならないのだと確信しました。たとえどのような理由があっても、人類は“戦争”をひとつの手段だと認識すべきでないと思います。人類は、新たな手段を見つけ出さなければいけないと思います。イラク戦争の報道を見ながら、何もできない自分が情けなくなり、また、人々の死をすんなりと受け入れてしまえる自分を悲しく思いました。でも、希望を持って問題を直視し、行動していかなければいけないのだと思います。

（楢原　知枝　16歳）

わたしは春休みに、自しゅべん強として、新聞の切りぬきをつかって、せんそうについてのかべ新聞を作りました。学校に持って行くと、クラスの先生が、クラスの友だちに、しょうかいしてくれました。わたしは、これからも毎日とどく新聞を使って、かべ新聞を作っていけたらいいなと思います。そして、みんなが少しずつでも色色と考えてくれたら、うれしいと思います。

（藤島　百花　8歳）

せんそうをするのではなくて、はなしあえばよかったと思います。

（比留間　光子　7歳）

平和を願うための戦争とは、本当にいいことなのか、それとも悪いことなのか、とてもなやみました。第一、フセインはどうして独裁してしまったのでしょうか？　それをおさえるためには、やはり戦争という手しかないのかもしれません。たくさんの人々の命が失われ、身も心も傷ついていくのに、これしか方法がないなんて、悲しいです。フセインは、こんなことまでやらないといけなくなったことを思い知ってほしいです。

（遠山　優香　13歳）

アメリカに戦争をやめさせることのできる人がいなかったのはどうしてだろう。フセインもへいたいだけつれてにげるのはいけない。ふつうの人はしんでいるんだぞ。小泉さんも、ブッシュさんも、ブレアさんも、アメリカにかってほしい人びとも、へいたいはしんでいるんだぞ。みんながすきなら、せんそうをやめてほしい。

（加藤　諒一　8歳）

イラクがどこにあるのかも分からなかったし、はっきり言って、戦争なんてなんなのか、さっぱり分かりませんでした。でも、ニュースをよく見てみると、大変なことが起こっているのだと気付きました。もし突然、日本が戦争にあい、毎日食べるものがなく、町がどんどん破壊されてしまったら…と考えると、とりはだがたつくらいおそろしくなります。

（原口　紗耶加　12歳）

アメリカ人はこの戦争をイラクをフセイン大統領の独裁から解放する「正義の戦い」だと主張しました。果たしてこれは正義なのか、と私は考えました。アメリカは、自分達のやり方を押し付けて、しかも戦争にまでもちこんで、それが終わったら、自分達で仕切ろうとして、イラクを自分達の思う「正しい国」にしようとしているように思えてなりません。大量破壊兵器を持っているのは、アメリカだって同じはずです。私は何が正義かなんて誰にもわからないよな、とこの戦争を通じて強く感じました。

（大平　乃里恵　17歳）